

(6) 大学生における口腔内健康状態と歯科保健行動の課題

川崎医科大学総合医療センター	○山下晏佳里	土屋はるみ
山陰労災病院		成瀬 実里
岩国市健康福祉部健康推進課		片瀬 早紀
岡山市保健所健康づくり課		小川 晴加
鳥取県西部総合事務所福祉保健局		神庭 海優
井原市地域包括支援センター		小西 未希
川崎医療福祉大学保健看護学科	富田 早苗	西田 洋子

【要 旨】

健康日本21（第二次）では、歯・口腔の健康について、「う蝕予防」「歯周病予防」を設定し、ライフステージごとの特性を踏まえた目標を掲げている。歯周病は、成人期以降の歯喪失の主要要因、また糖尿病や循環器疾患のリスク要因ともなっている。本研究は、大学生の口腔内健康状態の実態を把握し、生活習慣を含めた歯・口腔の健康づくりの示唆を得ることを目的とした。対象は、医療福祉系大学（以下、A大学）の1～4年生で、調査期間内に協力を得た350名に無記名自記式質問紙調査を行った。調査内容は、属性、歯科健診受診状況、自己管理スキルの評価となるブラッシング行動スキル尺度、歯科保健行動（1年以内の歯科定期健診、2回/日以上の歯磨き、就寝前の歯磨き）、歯磨きしやすい環境づくり等である。分析は記述統計と、歯科保健行動の有無別に関連要因の検討を行った。調査にあたり、A大学倫理委員会の承認を得て実施した。回収は

292人（回収率83.4%）で、未記入者を除く280人を分析対象（有効回答率80.0%）とした。う蝕ありと回答した者は全体で12.5%、歯周疾患は11.1%、歯科健診受診率は33.9%で、未受診理由は、面倒くさい、時間がないと続いていた。生活習慣では、夜食後の歯磨きを実施しない者が39.6%、一方、外出先で歯を磨く者は23.9%であった。歯科保健行動との関連では間食などの食習慣では関連がみられず、ブラッシング行動スキル尺度得点のみ有意差がみられた。大学での歯磨き環境では、トイレの環境改善、休憩時間の延長等を求めている。本調査結果から、A大学の歯・口腔内健康状態は概ね良い結果であったといえる。しかし、歯科健診受診率は、健康日本21（第二次）の目標値の1/2と低く受診率の向上が課題と考える。身近にできる環境改善として、大学構内のトイレ等の環境改善とともに、就寝前の歯磨きの徹底やブラッシング行動スキルに着目した健康教育の充実が課題といえよう。